

「周年事業」にみる 100 周年の軌跡

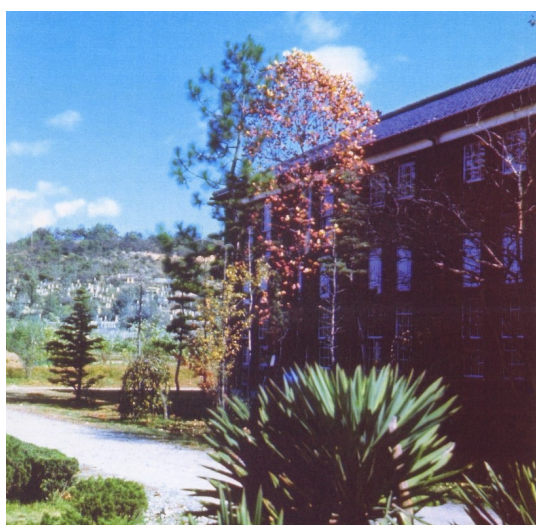
渉外委員会

城陵会(恵那高等学校同窓会)でこれまでに行われてきた周年事業についてご紹介します。

第 1 回 昭和 37(1962)年「創立 40 周年の記念式典・行事」

「**学校炎上** 昭和 37 年 8 月 25 日(土)未明(推定午前 4 時頃)、本館東北側より出火、水利の便も悪くその上連日の日照りで極度に乾燥しており、木造瓦葺二階建校舎(約 750 坪)、木造瓦葺平屋建理科室(約 190 坪)、木造瓦葺平屋建屋内体育館兼控室(120 坪)を全焼した。」

(城陵誌 半世紀の歩みより)



現在の正門北付近から本館東側方向を見る
昭和 35(1960)年頃の撮影



現在の体育館北側入口付近から本館焼跡を見る
昭和 37(1962)年 8 月 26 日以降の撮影
写真はいずれも高校 1 回古山精さん提供

1 か月余後の、「創立 40 周年の記念式典・行事」前に起きてしまった大火災

「9 月 6 日松野元知事視察、復興の陳情がなされ、16 日知事再選が決ると共に、復興計画も促進された。40 周年記念式は取りやめ、悲歎のなかにも励し合い、復興の誓いをかわして、同窓会、PTA 役員の内輪の集まりを 10 月 7 日にもったことであった。」(城陵誌回想録 深井重三郎校長より)

前年より準備してきた記念式典中止を余儀なくさせました ……

「**復興への歩み** (前略) 異常な逆境下ではあったが、勉学にはむしろ張りがあり、お互いの連帯感も深められるところがあった。9 月 11 日には火災後初の生徒議会も開かれ、再建問題をめぐって活発な意見のやりとりが行われた」(城陵誌 半世紀の歩みより)

「**焦土に迎えた 40 周年** 焼けあとの整地作業が、無気味なブルドーザーの噪音をかきたてながらはじめられている。あっけない程の速さで、残骸をさらしていた体育館や音楽室などの建てものを引き裂いてゆく。初代の阿部栄之助校長が丹精されたと聞いている数多くの植木も、焼けただれた地はだをさらけて、根こそぎに倒れてゆく。感傷というもののしのびよる何らのすきをすら許さない白昼の推移を、ただ茫然として灰くずを浴びながら見守っているばかりである。……『深井校長・城陵新聞』第 110 号

こうした『郷愁につ
らなり、思念の象徴で
もあった城ヶ丘の風物
の変ぼう』下で、昭和



37 年 10 月 6 日、40 周年

40 周年記念文鎮

記念式典が旧講堂でささやかに挙行された。第 15 回学校祭も式典後の文化祭、翌日の体育祭と力一杯の演技を示して終了した。焼跡からそっくり堀り出された 40 周年記念の“南部鉄製かぎ形文鎮”は、猛火をくぐった黒光りの色に、当時をしのばせる格好の記念品ともなった。」（**城陵誌 半世紀の歩みより**）

大惨事の起きた中で、ささやかとはいえ記念式典を挙行、学校祭も力一杯の演技で締めくくる事が出来たのは素晴らしいことと思います。これが火災への悲嘆に区切りをつけ、旧同窓会館(現 PTA 会館・40 周年記念事業として計画 37 年 12 月 18 日地鎮祭 38 年 5 月 26 日竣工)、第 2 代校舍建設(37 年 12 月 21 日起工式・38 年 8 月 14 日竣工)、第 1 体育館建設(38 年 8 月 15 日地鎮祭、39 年 2 月 11 日竣工)、部室・自転車置場・倉庫建設(39 年 1 月最終完成)と最新の設備をもつ恵那高校を火災後 1 年半で誕生できた事に繋がられたものと思います。

もちろん火災から間を置かず地元市町村からの復興に向けた協力、県内諸校、有志団体、一般市民と多くの人々の厚意が届けられたことは忘れないでいたいものです。